



「3・11」を伝える・富岡(下)
 福島原発汚染視察⑥

「時が止まったまま」と放射能汚染で全く使用できない表現がある。富岡町

で見た風景はまさにその町内の被曝(ばく)の様子通りで、五年半という長い間時は止まったままだ。を説明してくれた語り人の女性が「不祥事でお騒

がせしたバドミントンの写真の県立富岡高校は海岸からは離れた少し坂道に登った内陸部にあ

り、津波による被害はなかった。四階建ての校舎や体育館は五年半前のまま

で、フェンスには全国高校サッカー選手権大会出場

の横断幕が当時のままになつている。しかし校舎は

かに女子バドミントンでも日本を代表するよ

うな選手がこの高校の卒業生。バドミントンだ

けでなく、サッカーでも全国レベルで活躍し

ている選手がいる。立ち寄りなかつたが

日本サッカー界初のナショナル

使用できない富岡高校舎



トレーニングセンター「Jヴィレッジ」もこの町にある。富岡高にはサッカー、バドミントン、ゴルフなどの国際・スポーツ科が設けられ、町をあげてスポーツ振興に取り組んでいた。

被曝はスポーツ振興にも大きな影響をもたらしているのだ。

バスは富岡商店街に入り、下車が許された。語り人の実家の時計店の前

ふとん屋にはシャッターがなく、ガラス越しに特

売の四千八百円という値札がついたままのマット

レが五年半前のまま展示してある。色あせた値札

が五年半の長さを物語る。

商店街の除染作業は終わり、来年の四月には「避難指示区域」から外され

住めるようになるらしいが、果たして何人が帰宅

するかは予想できないという。商店街としての機能

を取り戻すには相当な時間がかかるだろう。

私が住む団地でも高齢化が進み、最近、空き家

が目立つようになった。人が住まないで二、三年過ぎ

るとその家は住めなくなり、建物を壊し、更地にし

ないと売れないという話りに空しい。

六年間も住めずに除染が終わったからと簡単に

住めないことはよくわかる。とにかく富岡町をは

じめ被曝地域がどれほど重い十字架を背負わされ

ているかが伝わってくる。

富岡町民を「原発難民」と表現した人がいる。

佐藤紫華子さんは「原発難民の詩」で、ふるさとに

ついて次のように書いている。

〈ふるさと〉

呼んでも 叫んでも 届かない

泣いてももがいても 戻れない

ふるさとは 遠く 遠のいて

余りに遠い 近いけど 遠いふるさと

と……

ただただ、一日も早く

住み慣れた自分の家で日

常生活が過ごせるように

と祈るしかないことが、余



除染作業中という旗と汚染廃棄物を入れたトン袋が各地に